

JR西日本財団 NEWS

公益財団法人 JR西日本あんしん社会財団

〒530-8341 大阪市北区芝田二丁目4番24号 TEL: 06-6375-3202 FAX: 06-6375-3229

E-mail: jrwarzaidan@westjr-anshin-f.jp http://www.westjr-anshin-f.jp/

2010.11 発行 Vol.2

CONTENTS

1 ▶「救急フェア」の開催

▶助成事業紹介

2 ● 上智大学グリーンケア研究所

3 ● あしなが育英会

4 ● 各公募助成先 (12 団体)

6 ▶財団役員等の紹介

8 ▶TOPICS

『救急フェア ~気軽に体験、緊急対応~』の開催



心肺蘇生法の実技体験

日時 平成22年10月30日(土) 13:00~16:30

会場 JR尼崎駅北側駅前広場特設会場

プログラム

- ① AEDの使用や心肺蘇生法の体験コーナー
(応急手当普及員等による実技指導のもと、AEDの操作や心肺蘇生法を体験していただきました)
- ② 非常ボタン体験コーナー
(駅のホーム非常ボタン、踏切非常ボタンの操作を体験していただきました)
- ③ 救急資機材の展示と救急相談コーナー
(救急救命活動で使用する資機材の展示や救急隊員による応急手当等に関する相談コーナーを設けました)

平成22年10月30日(土)、駅のご利用者や一般市民の方々を対象に、救命処置や駅における緊急対応を気軽に体験していただくことのできる「救急フェア」を、JR西日本との共催により開催いたしました。

このフェアでは、尼崎市消防局のご協力のもと、応急手当普及員の資格を持つJR西日本社員が指導を行う「AEDの使用や心肺蘇生法の実技体験コーナー」をはじめ、「駅ホームや踏切非常ボタンの操作体験コーナー」、「救急資機材の展示と救急相談コーナー」といった3つのコーナーを設けました。当日は台風の影響ですっきりとしない空模様でしたが、3つのコーナーに延べ500名を超える方がご参加されました。特に心肺蘇生法の実技体験コーナーでは、家族連れを中心に順番待ちができるほどの盛況ぶりでした。

当財団では、事故、災害時における一般市民の方々による初期対応、初期救護(ファーストエイド)の重要性を啓発したいと考えており、今後も同様のイベントを継続的に開催し、市民の方々と直接触れ合いながら、「安全で安心できる社会づくり」のお手伝いのできればと思っています。

AEDの使用や心肺蘇生法の体験コーナー

15~20分というごく短時間で、しかも少人数制で一連の応急手当を体験できるとあってか、受講されたほぼ全員の方から、「今後も同様のイベントに参加したい」、「継続的に開催してほしい」との肯定的なお声をいただきました。また、小中学生や家族連れ、ご高齢の方など幅広い層の方にご参加いただき、救急救命や応急手当に対する社会の強い関心が伺われました。



非常ボタン体験コーナー

非常ボタンの操作体験をされた参加者にアンケートを行った結果、「今後は抵抗なく非常ボタンを押すことができる」といったご意見が大半を占めました。しかし、一部では「実際の場面では気が動転してしまう」、「ボタンを押す基準がわからない」、「列車を遅らせ(止め)てしまうのが心配」というお声もあったことから、今後もJR西日本と協力して啓発を続けていく必要性を感じました。



【参加者からのお声】

- もし自分の目の前で倒れた人がいたら、今回の経験を活かしたい
- 前から興味があったが、今回無料で講習を受けられたので良かった
- 防災に関する知識を深めたいので、またこういった機会をつくって欲しい
- 応急手当普及員にマンツーマンで教えてもらい、よく理解できた
- 経験のあるなしで違うと思うので、大変よい体験ができた



愛する家族や親しい人を失った後に体験する複雑な情緒的状态を「グリーフ（悲嘆）」と言います。現代社会では、核家族化の進行や人間関係の希薄化に伴って、大切な人の死に直面した人たちを支えるグリーフケアの必要性がより一層高まってきています。

尼崎市にある上智大学グリーフケア研究所では、公開講座「『悲嘆』について学ぶ」とグリーフケアの実践に携わる人材の養成講座を開講し、悲嘆やグリーフケアに対する社会の理解を深め、その普及啓発を図るとともに、悲嘆者への直接的なケアを実践することを通じて、すべての人々が心身ともに健康的な生活を送ることができる社会の構築を目指しています。

公開講座

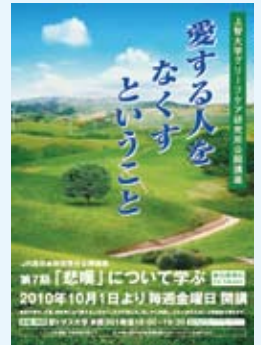
「『悲嘆』について学ぶ」

本講座は、一般市民向けの公開講座として、「事故や事件、災害、病気等により愛する人をなくした方の悲しみ、苦しみに共感し、ともに歩む」ことを目的としています。平成19年10月の開講以来、悲嘆やグリーフケアの普及啓発や学習の場となっているだけでなく、実際

に悲嘆に陥られている方々の癒しの場にもなっています。

大学教授や医師、作家、芸術家、社会活動家といった多種多様な分野の方々が「悲嘆」をテーマに講演され、現在開講中の第7期（平成22年10月1日～平成23年2月4日）では、聖路加国際病院理事長の日野原 重明先生、京都大学こころの未来研究センター教授のカール・ベッカー先生、「夜回り先生」こと花園大学客員教授の水谷 修先生などの講演が順次実施されています。

本講座は、応募初日で募集定員をはるかに超える約1500人の応募がありますが、これは、悲嘆やグリーフケアに対する社会的なニーズが高まってきていることのひとつの現われだと言えます。



カール・ベッカー氏（京都大学こころの未来研究センター教授）

1951年アメリカ生まれ。スピリチュアルケア、ターミナルケア、生命倫理、医療倫理等の研究で国際的に活躍。本公開講座では、第2期、第5期、第7期で講演。

今回は、去る10月8日に「死者から学べる死生観」をテーマに本講座3回目となる講演をしていただいたカール・ベッカー先生に、講演内容を含めお話しを伺いました。

ー 現代の日本人の死生観についてどう考えておられますか。

日本人は古来、臨死体験に匹敵する往生等を経験的に知っており、死を自然の流れとして、自らの人生の一部として受け容れてきた。しかし、30年程前から死を病院や施設に委託することで、「看取り」が少なくなり、リアリティのない死が増えた。死の現実を目を向けず、死を話題にしなくなったことから「死は怖い」と考えるようになった。

ー 「死は怖い」と考えるようになった日本人に必要なことは何ですか。
義務教育段階での「死の教育」が非常に大事だと考えている。遅くとも中学生になるまでに、ほとんどの人が死について考えるようになるが、「死の教育」は「死を招かないための教育」であると同時に、「グリーフの予防注射」として大変有益なものとなる。

ー 「グリーフ（悲嘆）」についての研究はどのように進んできているのですか。
かつて西洋では、フロイトの見解によって、「死は終わり、忘れろ」という考え方が定着していたのに対し、20年程前から、心の中で亡き人と新たな関係性を再構築するという考え方が、欧米でも注目を浴びている。それは、日本のお墓参りやお仏壇のような儀式・儀礼等に

学び、亡き人の遺産である知恵を想い起こし、生き方に反映させる「Continuing Bonds（途切れない絆）」という名の理論が提唱されているからである。

ー 悲嘆にお苦しみの方とどう向き合うことが大切だと思いますか。

私としては社会貢献活動などをすることを勧めている。仕事や学業等で外部との関わりを深めていくことで、自分自身の悩みや人生への疑問から少しずつ解放されていく。何より社会とのつながりを持つことが大切だ。また、「失ったものは大きい、生きている方と関わり、大事な人が目の前にいることに気付いてほしい」「病院でのボランティアなど、人が亡くなる場面に関わってほしい」ということを伝えていく。心の中で亡くした人を大事にしながら、一方で新しい世界と関わっていくことがとても重要だ。

ー 最後にこの公開講座についてどう感じていますか。

死についても語られなければ、超高齢化社会はますます淋しく悲しい社会になる。本講座は、悲嘆に苦しんでいる方だけでなく、悲嘆に関心を持つ多くの一般市民が聴講している点で健全な講座だと思う。学問の目的は、物事を客観的に見る力を身につけ、将来を考えることにある。ならば、一番確実にやってくる将来について勉強しない訳はない。老病死は避けられないので、だれもが必要となる勉強は、死生観教育など、死を考える勉強だと思う。

グリーフケアの実践に携わる人材養成講座

平成21年4月から、グリーフケアに携わる人材や市民ボランティアを養成する人材養成講座が開講されています。本講座は、「基礎コース」、「ボランティア養成コース」（基礎コース修了者対象）、「専門コース」（ボランティア養成コース修了者対象）の3つのコースから成り、各コース1年間のステップアップ方式となっています。開講2年目の今年度は、「基礎コース」と「ボランティア養成コース」を合わせて約80名の方が受講されています。

人材養成講座の修了者には、市民ボランティアとして地域社会において拠り所を失った方のためにグリーフケアの場を提供したり、専門的知識を活かし、医療、保健、福祉などのヘルスケアチームの一員としてグリーフケアを提供したりと様々な分野での活躍が期待されます。

「世界で自分が一番不幸だと思っていたけど、自分よりつらい思いをしている仲間が頑張っている。自分も全力で頑張ろう。」

あしなが育英会では、災害や事故、病気等様々な理由で親を失った遺児の方への奨学金貸与といった経済面での支援とともに、子どもたちへの継続的な心のケアに積極的に取り組まれています。毎年夏休みに実施する「つどい」は、子どもたちの精神面での支援における中核をなす事業となっています。

「つどい」は、『自助』、『連帯』、『共生』をテーマとして開催され、同じ境遇の子どもたちが集い、寝食を共にして自身の体験や思い等を語り合うことを通じて、お互いを思いやる一方で、自分の内面を見つめ直す貴重な機会を提供しています。子どもたち同士のピアサポート（自助支援）により、多くの子どもたちがわだかまりを捨て、心から語り合える友人を得るとともに自立に向けて踏み出していき、「つどい」は、最愛の親を失った子どもたちに「ひとりじゃない」ことを気付かせ、希望を持って前向きに生きる力を与えています。

高校奨学生をつどい(関西地区)

関西地区の「高校奨学生をつどい」が、8月9日から12日まで、「淡路青少年交流の家」で開催されました。220名の奨学生が参加するとともに、大学等に通う先輩奨学生たちが「つどい」のリーダー役や運営スタッフとして多数参加していました。「つどい」では、レクリエーションや野外活動を通して奨学生同士が交流しながら、将来のことを考えるきっかけを提供しています。



「高校奨学生をつどい」全体写真（写真提供：あしなが育英会）



神戸レインボーハウス
虹の心塾塾頭

柳瀬 和夫氏

「こんなにつらい思いをしているのは自分だけではないか」という思いを抱えた遺児（家庭）は、放っておくと社会からどんどん孤立してしまいます。経済的な

面で生活が苦しく、顔を上げられないような状況に陥っている遺児も多くいます。私たちあしなが育英会では、遺児たちにたくさんの応援してくれる人たちがいることに気付いてもらい、お互い励まし合いながら自分を見つめ直し、そして将来のことを考えてもらいたいと思っています。「高校奨学生をつどい」には、大学生を中心とする遺児たちが多数参加しお世話をしていますが、辛い経験をした遺児たちこそ本当の意味で人に優しくなれるのだと思います。私も遺児の一人ですが、高校生の頃にこの「つどい」に参加していれば今とはまた違う人生だったのではないかと思います。

キャンプをつどい

小中学生を対象とした「キャンプをつどい」が、8月25日から27日まで、兵庫県立いえしま自然体験センターで開催されました。39名の子どもたちが参加し、50名を超える学生ボランティアの方々がファシリテーターとなり、海水浴やキャンプファイアーなどを通して交流を深めるとともに、心のケアプログラムにおいて子どもたちのみならず、ファシリテーターも含め、自身の体験や気持ちを語り合いました。



兵庫県立いえしま自然体験センター



神戸レインボーハウス
ディレクター

富岡 誠氏

親を亡くしたことで孤立感を抱える子どもたちは非常に多くいます。日常生活の中ではなかなか難しいのですが、自分と同じ境遇の子どもたちがいるということを知ることがとても大事だと考えています。子どもたちには、「つどい」を通じて歩み出すきっかけや新しい目標を見つけてほしいと願っています。開放的な自然の中で、親を亡くしたこと自体もそうですが、日常生活で感じていることを同じような境遇にある子どもたちや学生ボランティアと触れ合い、語り合うことで、少しでも気持ちが楽になって、前向きになってもらえればと期待しています。自らの体験や気持ちを分かち合うことが心の支えになり、参加した学生ボランティアの姿をモデルに、「あんなお兄さん、お姉さんになりたいな」という気持ちになってもらいたいと思っています。

公募助成事業 ～「安全で安心できる社会」の実現に取り組む活動～

17件の活動に対し、1,343万円の助成を行っています。

◆平成21年度 活動助成先・活動テーマ一覧◆

NPO法人あすかコミュニティ ※	地域防災センターを設置し、防災アドバイザーの育成をはかり、高齢者・障害者を中心とする住民の防災意識の向上と防災グッズの普及をはかる。
NPO法人ASUネット ※	4.25メモリアル市民の集い&「4.25証言」地域力 冊子発行
應典院寺町倶楽部 ※	寺院を拠点としたグリーン・コミュニティのネットワーク
NPO法人大阪被害者支援アドボカシーセンター	犯罪・事故の被害者による手記集の発行
NPO法人大阪ライフサポート協会 ※	『いのちの教育』～心肺蘇生法とAED(自動体外式除細動器)の普及活動を通じて命の大切さを啓発する～
語り部KOBÉ1995	阪神・淡路大震災の被災者と被災地の大学生の協働活動を通じた防災教育と命の教育の実践
関西学院ヒューマンサービスセンター ※	2009年8月の台風9号による影響で大きな被害を受けた、兵庫県佐用町における竹炭焼きを通しての復興支援や被災商店街周辺の活性化。
京都橘大学救急救命研究会 ※	かけがえない命を守るため さらなる救命率向上を目指して
越木岩自主防災会 ※	わすれない、あの日を！そなえよう、越木岩！死んだらあかん！
「空色の会」～JR福知山線事故・負傷者と家族等の会～ ※	「4.25あの日を忘れない」～被害者の真の回復と、事故の風化防止、安心で安全な公共交通機関の実現を願って～
NPO法人高槻ライフサポート協会 ※	心肺蘇生法普及活動、AED(自動体外式除細動装置) 使用法普及・設置推進活動
宝塚不登校の会「サポート」 ※	人生の危機に向き合うための講演会：『笑いは副作用のない処方箋～遺伝子スイッチ・オンの生き方』
多文化共生センターひょうご	「多言語版鉄道あんしん利用ガイドブック」の作成
フレンズ! 川西フェスティバル実行委員会 ※	～JR福知山線列車事故被災者支援募金イベント～ Friends!かわにしフェスティバル 2010～
BasicLifeSupportKOBÉ	救急処置を行うことの大切さと重要性を、企業や学校において講習を行うことにより広めていきたい。また、イベントでの救護活動等で参加者がイベントに安心して参加できる環境を作ることにより、地域社会の活性化に役立ちたい。
みんなでつくる学校とれびりんか	阪神・淡路大震災での被災者との交流で学んだ精神的ケアの大切さを風化させるな! ～被災15周年の想いをオリジナル劇で発信(「おじいちゃんの時時計」)
レスキューロボットコンテスト実行委員会 ※	第10回 レスキューロボットコンテスト

今回は「※」マークがついている団体の活動をご紹介します。今回、ご紹介していない団体は次回以降に掲載する予定です。

『地域防災センター』の開設

NPO法人あすかコミュニティ



開設当日の様子

災害弱者である高齢者や障がい者への地域での支援体制を強化するため、6月28日、阪急崇禅寺駅近くに「地域防災センター」が開設されました。同センターは、日常的に高齢者や障がい者が憩う場として活用されており、防災グッズの展示・販売を通じた普及促進や防災アドバイザーの育成に取り組むなど、「防災」の問題

を中心に地域住民が集う場所として賑わいを見せており、防災意識や地域力の向上に寄与しています。

『夏のエンディングセミナー』の開催

應典院寺町倶楽部

7月10日、18日、25日の3回にわたり、大阪市天王寺区の大蓮寺・應典院で「遺族とグリーンサポート」をテーマとして、お墓やお葬式のあり方等といった視点からグリーンケアを考える「夏のエンディングセミナー」が開催されました。各回のセミナーでは、「遺族」を中心に据え、グリーンケアや地域コミュニティとしての寺院が果たす役割等について、経験豊かな講師陣からの話題提供と参加者からの積極的な質問を通じて、深い学びが得られました。



7月18日のセミナーの様子
(写真提供: 應典院寺町倶楽部)

『4.25メモリアル市民の集い』の開催

NPO法人ASUネット



ASUネットのメンバー
(写真提供: NPO法人ASUネット)

「たとえ貴重な体験であっても何もしなければやがて人々の記憶から薄れていく」とのコンセプトのもと、福知山線列車事故の体験や救助活動での助け合い、そして命の尊さを広く語り伝えていくことを目的として、4月24日に尼崎市の聖トマス大学にて「4.25メモリアル市民の集い」が開催されました。80名程度の参加があり、事故体験者と救護救急活動をされた方が同じ机を囲んで事故を語り合い、命の尊さを伝える貴重な場となりました。

『救急防災フェスタ2010』の開催

NPO法人大阪ライフサポート協会

心肺蘇生法とAEDによる救命処置講習会を通じて、命の大切さを訴え、救命率の向上を図る活動を行っています。9月5日に大阪市天王寺区で開催した市民セミナー「救急防災フェスタ2010」では、初期対応の重要性や心肺蘇生、AEDの必要性に関する講演、専用のCPR(心肺蘇生) Training Box「あっぱくん」を使用したPUSH(胸骨圧迫)講習とAEDの操作講習、ならびに阿倍野防災センターでの防災体験(見学)などの学習の場を提供しました。



PUSH(胸骨圧迫)講習の様子
(写真提供: NPO法人大阪ライフサポート協会)

当財団にとって初めてとなる昨年度の公募助成では、大規模な事故、災害が起こった際の備えやその後のケアといった視点から「安全で安心できる社会づくり」に寄与しうる活動を募集しました。結果として応募のあった 64 件のうち 17 件に助成を行っています。今回は、当財団で訪問させていただいた 12 件の活動についてご紹介します。
(当財団では活動助成以外にも 8 件の研究に対して 1,432 万円の助成も行っていきます。)

『コミュニティカフェ』の開設

関西学院ヒューマンサービスセンター



コミュニティカフェの様子
(写真提供：関西学院ヒューマンサービスセンター)

平成 21 年 8 月 9 日の台風 9 号の影響で甚大な被害を受けた兵庫県佐用町の復興支援を目的として、関西学院大学の学生ボランティアが中心となり、佐用町にある商店街の空き店舗を活用したコミュニティカフェを月 1 回程度開いています。お茶やお菓子を囲んで気軽に交流できる場として、30 名程の被災地区の方が集い、大変な賑わいを見せています。その他にも、竹炭焼きを通じて、人とのつながりを大切にしながらまちの活気を取り戻すきっかけとなる活動を続けています。

防災に関する講習会の開催

越木岩自主防災会

阪神淡路大震災において洞察力と決断力がある地域の防災リーダーの存在が救助活動や復旧スピードを左右したことから、防災・減災の意識をもった人材の育成及び防災リーダーを中心とした地域力の向上を図ることを目的とし、定期的な防災訓練や講習会・研修等を実施しています。9 月 1 日の防災の日には西宮市の越木岩自主防災会地域住民を対象に講習会を開催し、救急隊員による胸骨圧迫や AED の使用に関する実技指導のほか、同防災会の特色を活かしたロープワーク講習が行われました。



講習会の様子

『救命処置のデモンストレーションと救命講習』の開催

NPO法人高槻ライフサポート協会

市民の健康で安全な社会生活に貢献することを目的に、心肺蘇生法の啓発と AED 設置に向けた普及活動を行っています。10 月 20 日、JR 高槻駅において“駅で人が倒れた”という想定のもと、市民による応急手当と現場に到着した救急隊による救命処置のデモンストレーションが実施されました。デモンストレーション終了後には駅を利用される一般市民の方々を対象とした心肺蘇生法の講習を行い、多くの方が受講されました。



デモンストレーションの様子

『Friends! かわにしフェスティバル 2010』の開催

フレンズ! 川西フェスティバル実行委員会

福知山線列車事故のご被害者の方々への支援と命の大切さを伝えるイベントとして、4 月 18 日に「Friends! かわにしフェスティバル 2010」が阪急川西能勢口駅前の広場で開催されました。今年で 5 回目の開催となるこのイベントではアマチュア市民が演奏等を行い、事故を風化させることのないよう出演者やスタッフが列車事故のご被害者の方々へのメッセージ記入や募金を訴えました。イベントの最後には、「翼をください」を参加者と会場の皆が一体となって歌う感動的なフィナーレとなりました。



フィナーレの様子

(写真提供：フレンズ!かわにしフェスティバル実行委員会)

『救急救命講演会』の開催

京都橘大学救急救命研究会

救急救命士を目指す学生が主体となり、年間を通して、救命率向上を目的とした講演会や講習会を実施しています。7 月 3 日に京都橘大学で開催された講演会では、「日本における CPR (心肺蘇生法) 普及の問題点」、「国家規模での AED の普及の効果と胸骨圧迫のみの蘇生法への期待」などといったテーマで、救命活動の重要性と蘇生法に関する一般市民への継続的な教育の必要性についての提言とともに、医療従事者による初期評価の重要性に関する講演が行われました。



救急救命講演会の様子
(写真提供：京都橘大学救急救命研究会)

『空色の菜』の配布と『メモリアルウォーク 2010』の開催

『空色の会』～JR福知山線事故・負傷者と家族等の会～

福知山線列車事故の風化防止と安全で安心な公共交通機関の実現を願って、「空色の菜～あなたの道しるべに～」の配布と「メモリアルウォーク 2010～たどり着きたかったあの場所へ～」が開催されました。4 月 24 日のメモリアルウォークには、一般市民の方を含む 46 名が参加され、事故に対する様々な思いを語り合いながら、JR 塚口駅近辺から事故現場の献花台を経て JR 尼崎駅までの約 4 km の行程を歩きました。



メモリアルウォークの様子

『出会い・笑いは副作用のない処方箋 遺伝子オンの生き方』

宝塚不登校の会「サポート」



講演者・パネリストの方々
(写真提供：宝塚不登校の会「サポート」)

超える参加者があり、笑いの効用についての認識が深まるとともに、人との繋がりの大切さや生きることを考えるきっかけとなりました。

7 月 31 日、人生の危機に向き合ったときに人との出会いや笑いがいかに重要かといったテーマで、遺伝子工学の第一人者である筑波大学名誉教授村上和雄氏の講演と福知山線列車事故のご被害者の方も参加したパネルディスカッション等が宝塚市内で行われました。定員を大幅に

『第 10 回 レスキューロボットコンテスト』の開催

レスキューロボットコンテスト実行委員会

予選を通過した 12 チームが参加し、8 月 7 日、8 日に神戸市内において「レスキューロボットコンテスト」の本選が開催されました。競技は、6 分の 1 の災害地域の模型から人形を救助する方法で行われ、タイムだけでなく、レスキューにおける「心のやさしさ」も大事な視点として審査が行われました。このコンテストは、「技術を学び、人と語らい、災害に強い世の中をつくる」を理念とし、防災・減災意識の普及啓発に寄与するものとなっています。



コンテストの様子 (人形を救出中のロボット)
(写真提供：レスキューロボットコンテスト実行委員会)

財団役員等の紹介

公益法人である当財団の役員等には、様々な専門分野における有識者の方が参画しており、事業計画や個別事業の詳細等の策定において様々な視点から議論を行っております。このたびは、当財団役員等の方々の思いを交えて、ご紹介させていただきます。



(理事長)
佐々木 隆之
西日本旅客鉄道株式会社
代表取締役社長

西日本旅客鉄道株式会社は、多くのお客様のかけがえのない尊い命をお預かりしている企業として、福知山線において重大な事故を惹き起こしたことの反省の上に立ち、当財団を設立いたしました。

当財団では、その設立趣旨等を十分に踏まえつつ、地域社会の安全構築や事故、災害が起こった際の備え、その後の様々なケアといった観点から「安全で安心できる社会」の実現に寄与する事業に取り組んでおります。公益法人である当財団の運営については、今回ご紹介させていただく様々な専門分野の方々に役員等として参画いただいておりますが、今後とも皆様方のお力をお借りしながら、この財団ならではの事業を推進していけるよう工夫を重ねてまいりたいと考えております。

また、助成させていただいた諸団体の皆様には、「安全で安心できる社会づくり」に寄与する様々な活動に取り組み、私どもの財団としても大変意義深く感じております。当財団の担当者が、各助成先に順次お伺いしており、今回の財団 NEWS では活動に取り組まれている状況をご紹介させていただくことといたしました。

財団設立後2年目となり、少しずつではありますが、着実に事業を進めてきているところがあります。

今後とも広くご支援やご指導等を頂く中で、地域社会の皆様のお役に立てるよう全力で取り組んでまいりたいと思っておりますので、よろしくお願ひ申し上げます。

評議員



小林 潔司
京都大学経営管理大学院院長
専門：リスクマネジメント

安全・安心な社会を実現するために、想像力を豊かにし、われわれの身の周りにどのように危険なこと（リスク）があるのかを考え、被害の発生を可能な限り小さくする方法について考えています。



寺嶋 潔
財団法人運輸政策研究機構顧問

日比谷線脱線衝突事故の当事者として、ご被災者の方々の筆舌に尽くしがたい深いお悲しみやお苦しみに向きあった体験から、少しでもお役に立つことができればとの思いで参画させていただいております。



鳥井 信吾
サントリーホールディングス株式会社代表取締役副社長
公益財団法人サントリー文化財団理事長

安全で安心できる物やサービスの提供はすべての企業に共通した最大の使命です。酒類食品メーカーで食の安全・安心に携わる者として、分野は異なりますが少しでもお役に立てればと存じております。



野尻 武敏
神戸大学名誉教授、コープこうべ協同学苑学苑長、
公益財団法人ひょうご震災記念21世紀研究機構顧問
専門：経済政策論、比較体制論、高齢者問題

人の命は「天下四海より重し」人は「自分の命と言うが私すべきものに非ず」。三百年も前の貝原益軒の言葉だが、今日の安全安心の営みも、そうした確信に発するのでなければ結局は根無し草になる。



表具 喜治
公益財団法人ひょうご産業活性化センター理事長

家庭や地域社会など日常生活の中での助け合い、安全・安心をしっかりと捉えた企業活動、「安全で安心できる社会づくり」は現代社会の重要な課題です。私たち一人一人が行動することが大切です。



西川 直輝
西日本旅客鉄道株式会社代表取締役副社長

重大な事故を惹き起こし、公共交通の信頼を損ねた反省から、安全で安心な社会の実現にお役に立ちたいと願ひ、財団を設立しました。ささやかながら私自身も趣旨を忘れることなく、誠実な活動を継続しなければならないと考えています。



来島 達夫
西日本旅客鉄道株式会社取締役兼常務執行役員

重大な事故を惹き起こした企業の一員として、自ら財団運営に関わる責任の重さを痛感します。財団が真に社会のお役に立てるよう、一つ一つの活動の意味合いを確認し、広く安全構築に繋げて参ります。

理事



(常務理事)

中村 仁

西日本旅客鉄道株式会社取締役兼常務執行役員

公益財団法人として、設立の趣旨を踏まえた心のケアや安全な地域社会作りに役立つべく、関係の皆様のご協力を頂きながら、全力で「安全で安心できる社会」の実現に向け努力してまいります。



黒田 勝彦

神戸大学名誉教授、神戸市立工業高等専門学校校長
専門：土木計画学、運輸・交通計画学、リスクマネジメント

安全・安心は人類の普遍的な願いです。自然の脅威に対しては、古来より色んな知恵を育んできた日本人ですが、当財団の活動が更なる知恵を育む礎になればと思いお手伝いさせて頂いております。



坂下 裕子

こども遺族の会「小さないのち」代表

有志で非営利組織を立ち上げる意義と、その運営を維持する困難の、両方を経験してきた私は、市民グループのとりわけ草の根的な活動を影でお支えることが、当財団の使命の1つと考えています。



柏木 哲夫

大阪大学名誉教授
学校法人金城学院学院長、金城学院大学学長
専門：精神医学、緩和医療、心身医学

この財団の働きの二つの中心は安全とケアだと思っています。私は精神科医、ホスピス医として、多くの方々のケアに関わりました。その経験を生かして、財団の働きのケアの分野で役立ちたいと思います。



斉藤 行巨

社団法人関西経済同友会常任幹事・事務局長

2006年までの35年間、新聞記者として、多くの事件、事故、企業不祥事を取材してきました。記者の背骨は志と正義です。本財団でも、志と正義を掲げ、安心社会実現に向けて活動してまいります。



丸川征四郎

(前)兵庫医科大学教授
医誠会病院院長補佐

長年、救急・災害医療に携わった経験から、「隣人の命を慈しむ心」こそが救命・救助の原動力であり、市民が助け合う安全で安心な街づくりの第一歩と考えています。悲惨な事件、孤独死や孤食者が増えつつある昨今、日常生活にも「隣人の命を慈しむ心」の必要性を痛感しています。

監事



横手 恒夫

公認会計士、税理士

監事として、理事会等への出席及び計算書類等の監査を通じ、新公益法人としての運営に寄与できればと考えています。当財団の設立趣旨を踏まえ、その事業目的の遂行を期待しております。



小出 昇

西日本旅客鉄道株式会社常勤監査役

鉄道事業に携わる者にとって「安全」は最大のテーマであり、財団事業を通じて「安全」の大切さ「いのち」の尊さを学ぶとともに、「安全で安心できる社会づくり」に少しでも貢献できればと願っております。

事業審査評価委員



公文 啓二

近畿大学医学部奈良病院救命救急科教授
救命救急センター長
専門：集中治療医学、救急医学

私は集中治療の現場で「いのちを救う」医療に携わってきました。本財団の「安全で安心できる社会」の実現を図ろうとする取り組みに私の経験が少しでもお役に立つことができればと思っています。



黒坂 昌弘

神戸大学大学院医学研究科教授
専門：整形外科、スポーツ医学

安全で安心できる社会の実現のために役立てるよう、医学的な側面から貢献し、努力していきたいと思っています。



土田 昭司

関西大学社会安全学部教授・同副学部長
専門：安心心理学、社会心理学

安全・安心の達成のためには、多くの人が、制度や施設を十全に維持するために誠意を持って努力することが必要です。活動助成や研究助成をはじめとする本財団の活動が、社会の安全と安心を達成するために役立つことを願っています。



藤井 美和

関西学院大学人間福祉学部教授
死生学・スピリチュアリティ研究センターセンター長
専門：死生学、スピリチュアリティ、QOL (Quality of Life)

安心できる社会とは、つながり支えあう共同体です。人、社会、自然や宇宙、人間を超えるものとのつながり。その中でこそ命の尊さは見えてきます。そのような共同体づくりに貢献できれば幸いです。



矢守 克也

京都大学防災研究所巨大災害研究センター
(京都大学大学院情報科学研究科) 教授
専門：防災心理学

事故や災害は、それ自体悲しい出来事ですが、同時に、人の本性や社会のありようがそこに映し出される鏡でもあります。その意味で、安全・安心に真摯に取り組む方々を応援したいと思っています。



白取 健治

西日本旅客鉄道株式会社常務執行役員
安全研究所長

財団の活動を通じ、私たちの地域が少しでも良くなり、安全で安心して暮らせる町となるよう、皆様と一緒にがんばりたいと思います。活動助成や研究助成に今年も沢山の応募をお待ちしています。

昨年度の公募助成(活動助成)先における今後の活動予定

現在助成を行っている団体の今後の活動予定をご紹介します。なお、詳細につきましては、各団体へ直接お問い合わせください。

京都橘大学救急救命研究会 (TEL:075-574-4180)

講演会「救急医療・災害医療の現状(仮)」
●日程：平成22年12月11日(土)
●場所：京都橘大学
●内容：救急医療・災害医療の第一線で活躍する医師による現状をテーマとする講演

みんなで作る学校とれぶりんか (TEL:090-4289-5317)

被災15周年のミニコンサート・オリジナル劇
1部 ミニコンサート / 2部 オリジナル劇「おじいちゃんの古時計」
●日程：平成23年1月16日(日)
●場所：兵庫県立尼崎青少年創造劇場 ピッコロシアター(尼崎市)
●内容：阪神・淡路大震災で被災したパン作りの作業所における交流を描き、心のケアの大切さを伝えるオリジナル劇

越木岩自主防災会 (TEL:0798-72-7425)

第16回越木岩防災の日
●日程：平成23年1月23日(日)
10時~14時(小雨決行)
●場所：北夙川小学校校庭
●内容：人命救出訓練展示・起震車体験・煙ドーム体験・迷路体験・ゲーム・クイズなどフェスティバル形式で開催

NPO法人大阪ライフサポート協会 (TEL:06-6370-5883)

救急・防災に関する市民セミナー
●日程：平成23年1月16日(日)
●場所：大阪市立阿倍野防災センター
●内容：地震等の防災体験、地震後の心身のケアの重要性、PUSH(胸骨圧迫)講習、心肺蘇生法とAEDによる救命処置体験研修などを中心とするセミナー(参加費無料/先着約100名)

應典院寺町倶楽部 (TEL:06-6771-7641)

アートとNPOの総合芸術文化祭 コモンズフェスタ
「onとoffのスイッチ~私をひらく6つのチカラ」
●日程：平成23年1月13日(木)
~1月30日(日)
●場所：應典院

NPO法人あすかコミュニティ (TEL:06-6320-5252《地域防災センター》)

防災ボランティア講座
地域全体の防災意識を高めることなどを目的としたボランティア養成講座
防災に関心がある方なら誰でも参加できます。
随時開催中(場所・時間については未定)
各回定員20名 参加費無料
参加者募集中

NPO法人ASUネット (TEL:06-6421-5002)

「4.25の証言」地域力 冊子発行記念講演会
●日程：平成23年3月初旬

H22年度公募助成の募集

昨年度に引き続き、今年度も公募助成(活動助成と研究助成)の募集を行いました。

基本的に昨年度同様の募集内容となっておりますが、活動助成と研究助成をあわせた助成総額は、昨年度を上回る総額 3,000万円程度とさせていただきます。

【募集テーマと助成対象者】

福知山線列車事故を契機に設立された財団として、大規模な事故、災害が起こった際の備えやその後のケア、及び公共交通機関における事故防止といった視点から、以下の募集テーマを設定します。なお、公共交通機関における事故又は自然災害に関わるものを重点対象とします。



活動助成	募集テーマ	①心のケア又は身体的ケアに関する活動 ②地域社会における安全構築に関する活動 ③上記①、②の活動を補完するテーマとして、「安全で安心できる社会づくり」を推進する活動
	助成対象者	近畿2府4県に拠点があり、1年以上の活動実績のある非営利の民間団体(法人格の有無は不問) ※特に兵庫県、大阪府で活動を行う団体を重点対象とします。
	研究助成	募集テーマ
	助成対象者	近畿2府4県にある大学及び大学院、高等専門学校、公的研究機関、医療機関に所属する研究者

【助成金】

活動助成と研究助成を合わせて総額3,000万円程度を予定
※活動助成は1件5万円以上100万円以下、研究助成は1件200万円以内

【助成期間】

平成23年4月1日から平成24年3月31日までの1年間

【応募期間】

平成22年10月1日(金)から平成22年11月28日(日)まで

今後の財団主催セミナー

当財団の主催により、以下のセミナーを計画しております。

※詳細が決まりましたら、ホームページ等でお知らせします。

【こころのセミナー】(仮称)

- 日程：平成23年1月頃
- 内容：支え助け合う社会づくりをめざし「いのち」について考えることをテーマとする講演

【鉄道安全セミナー】(仮称)

- 日程：平成23年3月頃
- 内容：市民生活を支える公共交通機関である鉄道を素材として地域社会における安全構築をテーマとする講演

編集後記

今回は、当財団が助成させていただいている団体の取組みをご紹介します、より多くの皆様に各団体が行う素晴らしい活動を伝えたいとの思いで作成いたしました。発行にあたり、訪問させていただいた助成先の各団体の皆様、インタビューを快く受けた頂いたカール・ベッカー先生等、多くの方々にご協力をいただきました。心より御礼申し上げます。

今後も定期的に発行してまいりたいと思っておりますので、ご支援いただきますようお願い申し上げます。(編集者：小山)